

異国で学び、生きる

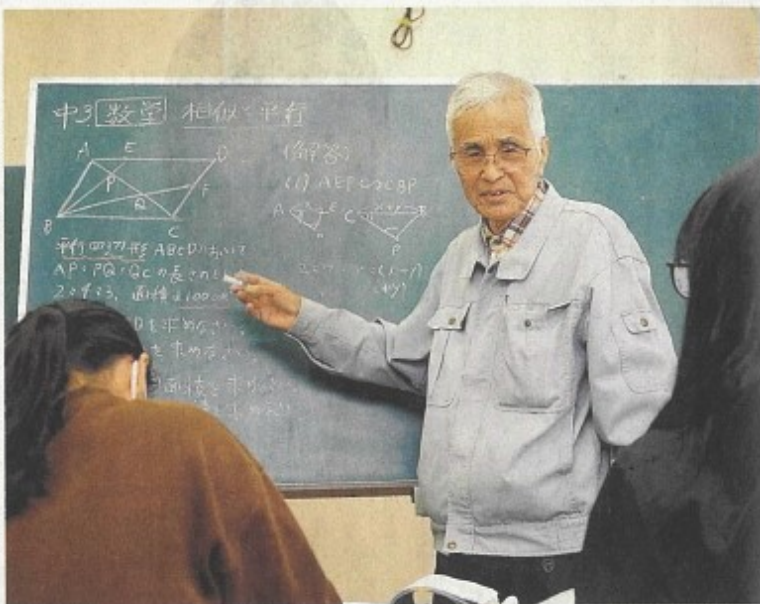
城東町補習教室の25年

87歳も大学生も子どもらに伴走

⑥ ボランティアの先生

昨年12月9日、年内最後の「城東町補習教室」が開かれた。黒板に平行四辺形が描かれ、高校受験を控えた中学3年の2人が面積を求める問題と向き合う。ボランティアの松本一彦さん(87)がチョークを手に、解き方を丁寧に説明する。

松本さんは教室を支える最高齢のボランティアだ。姫路市網干区の自宅から毎週、山陽電車とJR播但線を使い、片道1時間半以上かけ、教室が開かれる同市城東町まで足を運ぶ。船船用の発電装置などを造る企業で定年まで働き、海外での仕事も多かった。言葉が十分に通じない国では意思疎通や食事が常に不安だったが、体調を崩すなど困った時は現地の人たちが助けてくれた。



補習教室で子どもと漢字ドリルを解く「ジョートーズ」のメンバー＝姫路市城東町

支援の輪広がりに期待

修講座を通じて知った城東町補習教室の運営に、2006年ごろから携わる。中学生を中心に勉強を教え、推薦入試を控えた子どもへの面接指導も担う。成績の推移を独自に分析し、目標高校の合格に向けた勉強面の対策も手作りの資料で伝える。教室だけでなく、夜に生徒とインターネット電話をつなぐ日もある。

の選択肢が広がる。将来の自立につながるはずだ。口調が熱を帯びる。

「希望する高校に行かせてあげたい。その一心で活動している」と松本さん。これまで30人以上の高校合格を見届けてきた。「幼い頃に日本語を学んでいなくても、高校に行ければその先

最大約50人の子どもが集まる補習教室は毎回、松本さんら10人前後のボランティアが運営。大学の授業がきっかけで、22年夏には県立大の学生団体「ジョートーズ」も活動に加わった。メンバーは環境人間学部の学生を中心に約15人。交代で教室を訪れ、小学生の勉強に付き添う。難しい問題を避けようとする小学生に「頑張ってみよか」と優しく声をかけ、一緒に遊ぶことも。日本語をうまく話せない子ども言葉にも、じっくりと耳を傾ける。

「自分が海外で受けたことへの恩返しをしたい。退職し、別会社の勤務も終えた70歳の頃にそう思った。来日して言葉の壁にぶつかる外国人を支えるため、研

松本さんは学生の活動を歓迎しつつ、「ボランティアはまだまだ足りない」とつぶやく。教室は子どもが学校や家庭での悩みを相談する姿もあり、きめ細かい支えのためには、より多くのボランティアの存在が欠かせないからだ。

姫路で暮らす外国人は約1万3千人。その1割ほどが15歳未満で、補習教室のような居場所が見つかる子どもはまだ少ない。「外国にルーツのある子が自分の思いを話せる場はすごく大切。こういった場所や支える人がもっと増えてほしい」。松本さんの情熱は衰えない。



ボランティアとして「城東町補習教室」を支える87歳の松本一彦さん。姫路市城東町、城東町総合センター(撮影・辰口直之)

「おわり」(田中宏樹)